

Title	芥川龍之介の植物世界：感応する植物・植物への変容
Sub Title	The plant kingdom of Ryunosuke Akutagawa: The inspiration of plants and their metamorphosis
Author	西川, 正二(Nishikawa, Shoji)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.60 (2012. 3) ,p.23- 54
JaLC DOI	
Abstract	Ryunosuke Akutagawa loved plants. He loved to have flowers in his room, such as carnations or hyacinths in a vase or Christmas roses in a pot. He not only made haiku and waka about various flowers but also referred to a variety of plants in his letters, travel writings, and other works. His unrequited love was always expressed by flowers in waka. In the Kuzumaki Archive there are numerous fragments of writings classified as "Plants notes" or "Plant myths notes" which show his interest in plants and flowers during his childhood and youth. Akutagawa copied passages of flower fortune-telling, translations of English poems about flowers, some of which may contain his own translations, and tales and myths about metamorphoses into flowers. His drawings of trees seem to represent himself. Symbolic trees are found in his writings about his own life: a ginkgo tree in his kindergarten, a poplar in his junior high school, and a lime tree in his senior high school. His special interest in metamorphoses into sacred flowers is found in Marsh, St. Christopher, Jyuriano Kichisuke, and Ojyo Emaki. The writer's keen interest in Baudelaire's "forget-me-not" used in Marsh, which actually does not exist in Baudelaire's prose poem 54 "L'invitation au voyage", was aroused by a mistranslation of "revenez-y" as "forget-me-not" and must have been connected to Hakushu Kitahara and Rofu Miki's collection of poems entitled Forget-me-not. The forget-me-not is one of Akutagawa's symbolic "blue flowers". His love and knowledge in plants significantly informs his creative imagination.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20120330-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

芥川龍之介の植物世界

——感応する植物・植物への変容

西 川 正 二

1. 芥川の植物愛

芥川は庭や植物を作品に重要な象徴表現として数多く取り入れた¹⁾。庭にある植物はもちろん、様々な草木花卉が俳句や詩歌で数多く詠われ、植物は芥川にとって身近な存在である。自分の家や知人の庭、行きつけの店の庭、近所の雑木林・松林、並木、公園、植物園、日本・中国・西洋庭園、山の自然、山水画などの絵画の中の自然²⁾、文学の中の自然、など様々な風景の中の草木花卉を愛した。

旅先でも庭や植物に注目している。1913年7月に第一高等学校卒業後8月に静岡県不二見村の新定院に滞在し読書をして過ごした時も、友への書簡で周りの植物を描写している。

それから机を西向の窓の下にうつして本をよむ 窓の外は桑畑 幅の
広い緑色の葉に露が真珠のやうに光つて其間にうなだれた夾竹桃の赤
い花を蜂が唸りながらふるはせてゆく 土のにはほひ 八月の日光 十
時頃机を東の庭にむいた座敷へうつす もう簾一面に当つてゐた日が
椽に落ちて座敷には微涼が芭蕉の葉のほのかなにほひと共にうごいて
ゐる 白つちやけた砂まじりの庭の土に山茶花 枇杷 棕櫚竹が短い

影をおとす (17.116)

海水浴場へ行く途中でも、緑の葉や花に目が行く。

桑の葉黍の葉の緑、胡麻の花のうす紅 埃に白けた月見草がしほれ乍
ら路ばたにさいてゐる (略) 家々の間には玉蜀黍の葉がそよぎ黄色い
向日葵の花がさしのぞく (17.116)

1913年9月藤岡蔵六宛書簡(17.121)によれば、国木田独歩の『武蔵野』を読んで以来、玉川沿岸の村々を訪れるようになるが、秋の日に光る櫺の白い肌、「村役場の柵にさく赤いコスモスの花」や「小さな墓地にさく桔梗や女郎花」に「秋」の眼づかひを見ている。

芥川愛蔵のマリア観音を手に入れることになる1922年5月の長崎の旅では、謡の会場の庭の躑躅を詠ったり(「庭芝に小みちまはりぬ花つつじ」)、松尾氏別荘については「庭に青芝あり、桜あり。潺湲を絶たざる細流あり」と述べ、唐寺の芭蕉を詠い(「唐寺の玉巻芭蕉肥りけり」)、飲みに行った鶴の家では「林泉の布置、東京の料理屋に見ざる所なり」と庭に関心を示し「萱草も咲いたばつてん別れかな」の句を芸者照菊に与えている³⁾。

関東大震災前の1923年8月、鎌倉の割烹旅館平野屋では藤棚に咲く紫の花、花をつけた裏庭の八重の山吹、小町園では庭の池に菖蒲が蓮と咲き競っているのを見て、「自然に」発狂の気味のあるのを感じたりしている⁴⁾。

「軽井沢日記」(1924.9)では鶴屋旅館の庭の草木花卉を祝福するように列挙し、植物への偏愛がわかる。

この庭に植ゑたる草木花卉、したに掲ぐるが如し。松、落葉松、五葉

松，榧，檜葉，枝垂れ檜葉，白楨，楓，梅，矢竹，小てまり，山吹，萩，躑躅，霧島躑躅，菖蒲，だりあ，凌霄のうぜんはれん，紅輪草，山百合，姫向日葵，小町草，花魁草，葱，針金草，鬼ぜんまい，雪の下，秋田路，山蔦，五葉，——五葉の紋章めきたるは愛すべし。」(11.265-266)

芥川が編纂した『近代日本文芸読本』(全五集)(1925)には芥川の文学の好みが見られるが、第一集には、庭に植える嫩竹、芭蕉、柿、雁来紅が題材の近松秋江の「郊外小景」、小石川植物園の風景を描く北原白秋の「植物園小品」、向島百花園が出てくる「写生文の一例を示す」(芥川の序文の中の言葉)坂本四方太の「向島」、青々と繁った葦、柳やポプラ、夾竹桃と赤い薔薇、「蓮の白い花が遠い沼から見える」という描写もある吉田絃次郎の「千住の市場」、加藤武雄の「薬草の花」、他に詩では岩野泡鳴の「植ゑ忘れた百合の赤芽」や島崎藤村の「椰子の実」もある。第二集には與謝野晶子の山ざくらやあぶら菜、花うばら(花茨)が詠われる「山ざくら」その他、貧乏、迫害、病氣、孤独に苦しめられた「私達」が枝を折られたり灰を被ったりした後に白い三つの蒼をつける木瓜に生命力を感じる藤森成吉の「春」、山査子の藪で負傷して倒れた兵士を描く、全篇で山査子が象徴的に使われる二葉亭四迷訳「四日閑—ガルシン—」などがある。

第三集の冒頭の作品は永井荷風の「日本の庭」である。足にからまる落葉、笹つ葉、蔦葛、黒木林や山毛櫸林が出てくる中村星湖の「林野巡查の一日」、けだものの園、藤の花、夕顔、いちはつの花、山吹が詠われている正岡子規の「上野山」その他、牧水の歌「わが庭の竹の林の浅けれど降る雨みれば春はきにけり」、露西亞の自然描写のある徳富健次郎の「初対面」なども所収されている。第四集の冒頭は芥川がことごとく読んだという泉鏡花の小説だが、その始まりが「柳を植ゑた……」といきなり柳から入る「國貞ゑがく」、上田敏「落葉—ポオル・ゾルレエヌ—」、白秋の

「公園の薄暮」なども見られ、芥川の草木花卉や庭の好みが表れている。

芥川自身自分の植物の知識への自負があり、1919年7月池崎忠孝宛書簡では「合歓の花位心得てゐない奴があるものか僕は植物学なら君より遙に大家だと云ふ自信があるんだ」(18.617)と書いている。芥川の樹木の知識については下島勲が1923年5月春陽会の第1回展覧会へ芥川、室生犀星、渡邊庫助と見に行った時のエピソードで触れている。

(略) 上野公園の入口即ち不忍よりの土手に茂つてゐる、一寸八ツ手に似た葉の樹木を指して突然「この木の名を何といふのか當ててみたまへ」ときた。皆面くらつて眼をパチクリやつてゐる。私もさて何の木かな——或は西洋種かもしれないぞと考へてゐるうちに、「橡の木だよ」みんな田舎者のくせに駄目だね——ときた。一同哑然たりといつたかたちでありました⁵⁾。

中国旅行でも北京の樹木に注目している。「城外のポプラの並木、アカシヤの花咲く町屋、これらを城壁の上から眺めると、北京は實際、樹木の町といふ感じです。」⁶⁾

樹木の図なども好んで描いた⁷⁾。「樹式図」は模写した原本は不明であるが樹木の絵を描き写したものである⁸⁾。1918年井川恭宛絵葉書には松の木の隣で唐棕櫚の葉らしきものを持って佇む自画像もある⁹⁾。1920年に宮城県青根温泉から友人に送った2枚の絵葉書には木と一体になったような「樹下独座」の自画像もある¹⁰⁾。自画讃の「落木図」は1920年晩秋小穴隆一の実家にて游心帖に描いた7言絶句の讃の冬枯れの木や、1927年3月に葛巻左登子へ送った和歌自讃のものもある¹¹⁾。これらの樹木の図を見るとあたかも木が芥川自身を表しているような印象を受ける。『澄江堂遺珠』を編集した佐藤春夫は芥川が描いた枯れ木のイラストを繰返し使

用している¹²⁾。

2. 植物との感応—花・片思い

芥川の幼稚園時代に草木花卉に対するやさしい感情や恋愛感情と植物の結びつきも既に見られる。

この幼稚園の庭の隅には大きい銀杏が一本あつた。僕はいつもその落葉を拾ひ、本の中に挟んだのを覚えてゐる。(13.289)¹³⁾

その時好きになつた女生徒は「少女に似合はない、萩や芒に露の玉を散らした、袖の長い着物を着てゐたものである」(18.289)。後に草花の好みについては1925年に「草花は萩、女郎花、芙蓉など、日本風のを好むが盆栽は大嫌ひである。」¹⁴⁾と述べている。

花への嗜好は小学生上級頃の花占いに関しての抜書きにも見られる¹⁵⁾。この花占いは花束から一本を引き抜いて自分の未来の良人や妻の性質や職業を占うものであるが、例えば「風信子 ヒヤシンス 嬉戯家」, 「雛菊 早く出世する人」, 「さんざし 希望に満てる人」, 「薔薇 愛情のある人」, 「鬱金香 高慢な人」, 「榊 農夫」, 「ちきたりす 法律家」, 「はゝきゞ 醫師」, 「かたばみ 愛蘭土人」など25項目、22種類の草木花卉についての抜書きが見られる。花言葉の五十音順の抜書きの一部(「あ」から「た」まで)も残っている。「鳳梨 アナナス 完全」, 「藍色石竹 豫期せし成功」, 「白頭翁 オキナグサ 背信の恋」, 「水仙 余は恋のために瘦せたり」等¹⁶⁾。

一高一年生の時の1910年山本喜誉司宛書簡(17.24)には品川にあった花屋への言及がある。家族で花を楽しんでいることがわかる。「今日は家中妙華園へ何とか云ふ花を買ひにゆきました 僕にも行けと云つたのを断つりましたがこの手紙をかきながら「行けばよかつたつけ」と思つてます」(17.19) 同じ頃の山本喜誉司への書簡には樹の葉やチューリップが『邪宗門』の連想とともに見られる。「時々御月様が出ると樹の葉うす青く

光つて水々しく月の光にぬれながら 静に頭をふつてゐる」「チューリップ紅と白とのしぼりの八重がちつた、花びらを一つづゝひろつて、邪宗門の中へはさむだ夢のやうな酔ふた日のかたみには此花が何よりもふさはしいやうに思つた」(17.26)。

部屋の中でも生花を楽しんだ。1908年中学生の時に描いた花瓶のあじさいの水彩画や、俳句自讃の花瓶に挿した薔薇の絵もある¹⁷⁾。1913年6月山本喜誉司宛葉書に「蒲田へ行つてカーネーションの切り花をかつてきて机の上へのせて置きました 甘いにはひが部屋中一杯になります」とある。1913年11月に能書家の一高のドイツ語教師菅虎雄を鎌倉に訪ねた時も「自分はしみじみ先生があゝの青磁の瓶に幽菊の一枝をさしあゝの古銅の香炉いつしゆ てんえんに一炷の篆煙を上らせないのを残念に思つた」(17.130)と文人的生花の趣味が窺われる。1919年6月の日記「『我鬼窟日録』より」に「紫陽花を沢山剪つて瓶にさす。」(6.10)の記述がある。1920年11月香取秀真宛書簡では『枕草子』の生花についての段「おもしろくさきたる桜をながく折りておほきなる花瓶にさしたるこそをかしけれ」「匂欄のもとに青き瓶の大なるをすゑて桜のいみじく面白く云々」(19.864)の記述がある。1922年渡辺庫輔宛書簡に「ひとり遊びにめづるもの たゞ漢国のはにの壺(略)ふぢをさゝむとおもへども 藤もなきこそせんなけれ」(19.1146)と壺と生花に言及する西田天香の今様が引用されている。花の絵では1923年に庭の山吹を「丹念ニ写生」した「山吹之図」もある¹⁸⁾。

鉢植えに関しては、クリスマスローズの鉢植え(1925年)や他の鉢植えと写っている写真もある¹⁹⁾。1913年8月山本喜誉司宛書簡(17.III)では友人の平塚逸郎を府立三中に訪ねた時「静にあの四畳で独乙語の独習をしてゐる平塚にふさはしいやうな気がする」「まづしく土鉢の中にさく天竺蜀葵の赤」への言及がある²⁰⁾。中国旅行で諫草亭を訪れた時も手帳に「ココニギボシの鉢植多し」(23.383)とギボシの鉢植えに注目している。

『澄江堂遺珠』の「戯れに(2)」の愛する者と世を避けて住む住まいを

詠った詩にも鉢植えが出て来る。

汝と住むべくは下町の
昼は寂しき露地の奥
古簾垂れたる窓の上に
鉢の雁皮も花さかむ²¹⁾

芥川の女性への想いはこのようにしばしば花に託されるが、ヒヤシンスが1910年山本喜誉司宛書簡に見える。「ヒヤシンス白くかほれり窓掛のかげに汝をなつかしむ夕」(17.23) 生家新原家のお手伝いの吉村チヨへの帝大生時代の片思いの歌にはヒヤシンス、アマリリス、^{ナツシイサス}黄水仙、青葱が出て来る。「片恋の我世さびしくヒヤシンスうすむらさきににほひそめけり」(1913年)(17.100)等。白秋風のヒヤシンスである²²⁾。人妻吉田弥生への想いは1915年井川恭宛書簡で藤を詠んだ「人妻の上をしぬびて日もすがら藤の垂花わが見守るはや」「ほのぼのと恋しき人の香をとめば藤はかそけく息づきにけり」(17.179)等、藤が26首も詠まれる歌に見られる。1916年の書簡にも藤の歌は5首見られる²³⁾。芥川が「山梔子夫人」²⁴⁾と呼んだ片山広子への慕いは「越びと」(1925)の旋頭歌に詠われる。「寂しさのきはまりけめやこころ揺らがず、この宿の石菖^{せきしょう}の鉢に水やりにけり」(12.128)「たそがるる土手の下べをか行きかく行き、寂しさにわが摘みむしる曼珠沙華はや」(12.130-131)等。この旋頭歌には軽井沢の思い出の「羊歯の巻葉」や、楓、「^{せにわ}狭庭のもみぢ」,「多き冬木」, 笹などの植物も詠われる。臘梅は芥川の愛する花であったが、晩年平松ます子に「臘梅」と題した詩(23.477)を贈っている²⁵⁾。臘梅の匂いに想い人の黒子が想起されている。

芥川の最も強い嫉み、憎悪の時も花とともにあった。ねたみ心や「悪念」を詠う。

ひとをころせどなほあかぬ
 ねたみごころもいまぞしる
 垣にからめる薔薇の実も
 いくつむしりてすてにけむ²⁶⁾

松葉牡丹をむしりつつ
 ひと殺さむと思ひけり
 光まばゆき晝なれど
 女ゆゑにはすべもなや²⁷⁾

3. 花の詩・説話・神話の蒐集

藤沢市文書館収蔵の「葛巻文庫」の芥川龍之介資料には学生時代（中学・高校・大学）に書いたと考えられるノート断片が約 450 枚ある²⁸⁾。資料内容 2 として「植物ノート」, 「植物神話ノート」等と分類されている, 興味深い草木花卉に関する記述がある自筆ノート, 原稿断片があり, 芥川の花の詩・説話・神話への関心がわかる。

No.10-2（原稿表）から No.10-1（原稿の裏）にかけてはウァーズォース（ウィリアム・ワーズワース William Wordsworth）の“To the Daisy”「雛菊」の詩の最初のスタンザの訳がある。このスタンザの原文は川上瀧弥, 森廣著, 飯田雄太郎, 藤島武二画『花』（裳華房）の「雛菊」の項の p.114 に見られる²⁹⁾。この本は植物図鑑であると共にその植物に関する説話, 詩, 歌, 俳句, 文章, 花言葉などを載せている。No.10-2 は続いてバーンズ（Robert Burns）, 「ミス, トワムレー」, シェレー（シェリー Percy Bysshe Shelley）, ミルトン（John Milton）などの雛菊の詩への言及がある。これは川上瀧弥, 森廣『花』の「雛菊」の項の pp.117-118 部分を一部省略して写したものである³⁰⁾。No.269-1 の雛菊を歌った「グードの歌」もこの本の p.118 を写したものである。No.10-2 にはヘリック（Robert Herrick）の「水仙花に與ふ」と題された“To Daffadills”の第一

スタンザの訳もある。芥川所蔵の *The Poems of Robert Herrick* の目次の “To Daffadills” には赤線が引かれ、その詩の2スタンザのうち最初の1スタンザに赤線が引かれていて、この部分が No.10-1 に訳されているので、芥川自身が訳したものと推測できる³¹⁾。ヘリックの本への赤線は4つの詩に限られている。その一つが萎れた水仙を見て自らの死を想う “DIVINATION BY A DAFFADILL” の詩のタイトルであり、1914年山本喜誉司宛の書簡に「ナイドに限らず短い抒情詩がすきになりました ヘリックをよんだら黄水仙の詩にうなだれてダフオゲルのさいてゐるのを見ると自分もその前にうなだれて死にたいと云ふのがありました」とこの詩への言及がある³²⁾。“To the Virgins, to make much of Time” は第一スタンザ（「今日笑っている薔薇の花は明日は死んでいるかもしれないので、薔薇の苔を採りなさい」という内容）に赤線があり、花と短い人生という同じテーマへの興味が覗かれる³³⁾。No.266-2 にはバーنزの「山雛菊に興ふ」と題された “To A MOUNTAIN DAISY” の第1スタンザと第2スタンザの一行の訳がある。芥川所蔵の *Poetical Works of Robert Burns* ではこの詩の目次のタイトルに赤線があり、本文では “When upward-springing, blithe, to greet/ The purpling East” の部分だけ赤線がある³⁴⁾。この訳も芥川自身のものであるかもしれない。芥川所蔵のバーنزの本には赤線が多いが、偽りの恋人と薔薇の刺とを詠う “The Banks o’ Doon (Later Version)”（第2スタンザに赤線）、日の光に照らされ花咲く野が急に嵐になる失恋の歌 “I dream’d I lay”（これは全ての行に黒線）など、花と気まぐれな運命という共通のテーマへの興味も窺える³⁵⁾。コールリッジ（コールリッジ Samuel Taylor Coleridge）の詩 “Imitated from Ossian” の訳（題名は変えて「百合花」）（No.259-1）もある。この詩も同様に嵐に吹かれて短い命を歎く白百合が詠われている。百合の花の詩はコールリッジに続いてレイハント（リー・ハント Leigh Hunt）の “Songs and Chorus of the Flowers” の “LILIES” の第2スタンザまでの訳がある。

夏目漱石はバーنزについて、「但其非情の草木をも、己れと同一視す

るに至つては他に其の例なかるべし。」とし“*To A MOUNTAIN DAISY*”の一節を挙げて「一茎の野菊だも、且人間を以て遇せんと欲す。其天稟の至情、深く骨髓に浸み渡るに非ずんば、曷ぞ能く斯くの如くならんや。」、さらに“*The Banks o’Doon*”の2箇所を引用し「坡塘樹石に対するも、猶人に語るが如し。自然主義一方より其の頂点に達したりといふべし。」と述べ、「既に自然を以て内界の感じを有する者とすれば、之に対する観念は只に客観的なるのみならず、又主観的なり、之「バーンス」の先輩に異にして反つて野蛮人に似たるころなり。(略)「バーンス」は憐愛の極、遂に天地山川を己れと均等視するに至れるなれば、(略)其の自然を活すに於ては等しく一なり。」と評価している³⁶⁾。この花や木などの自然との一体感はロマンティックなはかない運命とともに、芥川がバーンズに共感したものであつたらう。

『葛巻文庫』の植物ノートには雛菊について、カレドニアの夫と長子をなくして悲嘆にくれる丸雛(マルヒナ)の話(No.13-1)もある。これは川上瀧弥、森廣『花』の「雛菊」の項にある話(pp.114-116)を途中省略して書き写したものである。No.13-2は北欧神話の秦皮樹(イグドラシル)の話。No.258-1, 2は福壽草、ハンノキ、コクワ、葡萄の神話。福壽草の話は蝦夷の神話であるが、土竜との結婚式当日に姿を消した女神が土竜に捜し出されて罰として天に帰れないように福壽草に変えられる。No.264-2にも「アイヌの植物談話」として女神の化身としての福壽草の記述がある。これらをもとにして芥舟狂生の名で「アイヌ神話 二、福壽草」を書いているのであろう³⁷⁾。No.263-2の「女郎花」では芭蕉の「ひよろひよると なほ露けしや女郎花」など女郎花の俳句が4種見られる。No.265-1は北欧神話のボルダーとヒイラギの木、寄生樹の話。No.265-2は菊の異名の契草の由来。No.266-1, 2は婚礼用の花環としての白薔薇の詩文。No.267.1, 2は葉の形状の専門的な分類。「線形葉」「披針形葉」「長橢圓形葉」「篋形葉」等等。No.267-2は植物の根、子葉、氣根、など

の日本語と英語対照表、攀縁茎などの専門的な語も多い。No.267-4は灌木、喬木の記述。No.268-1, 2は草木花卉の言い伝え。「白きうどんげの花さく時は凶也 黄なるうどんげの花さく時は吉也」「夜鬼灯をならすと枕もとへ蛇が出る」「茗荷を食べると馬鹿になる」「茄の木を薪とすると禍が起る」等等。No.270-1は山櫻の記述、隅田川の堤の櫻が享保の頃徳川將軍家に植えられたものであるという由来の記述等。No.272-2は向日葵の神話。

その他資料は尽きないが、芥川が植物についての植物学的知識、花言葉、言い伝え、詩、神話など、様々な面に興味を持っていたことがわかる。

4. 囁く植物・震える神経・病的な植物

「沼」（執筆時期 1918.3, 『改造』 1920.4）の情景は芦の茂った気味の悪い流れ灌頂や馬の骨があった大川の中州の経験が反映しているのだろう³⁸⁾。「沼」には「何かしゃべり立てる」「おれの丈よりも高い蘆」がいる。「水が眩く。藻が身ふるひをする」, 「木々さへ、一時はさも心配さうに吐息を洩らし合つたらしい」というアニミズム的精霊の世界である。「おれの耳を欺」す「この沼の精」もいる。

「新緑の庭」（1924.6）では、庭が植物達が会話するアニミズムの世界である。桜、椎、竹、芭蕉、梅という伝統的な草木などに、霸王樹（サボテン）があるのが異色である。他に八つ手、百日紅、霧島躑躅、石榴、苔、石、楓が登場するが、石はまだ寝ている、のんびりとした風情の庭である。ルナールの手本がある³⁹⁾。文人の庭に相応しい竹、芭蕉、梅も人間のように日常的な会話をする草木に変わる。「新緑」の庭の植物の擬人化だが、「黄疸」を病んだり、「寒気」がしたり、「毛虫がたか」る植物である。

「侏儒の言葉」（1923-1925）の「若楓」での芥川の感性は、生命力に溢れている若楓も、それだけ一層気味の悪いものになり得る。「若楓は幹に手をやつただけでも、もう梢に簇つた芽を神経のやうに震はせてゐる。植物と言ふものゝ気味の悪さ！」（13.99）

棕櫚は芥川が好む植物の一つであるが、学生時代のノートに書かれた「えそぼのふあぶらす（仮）」に「棕櫚と竹の事」としてつむじ風に「志を下さず肱を張て」「さんざんにふき折つて根ごれになつて果てた」高慢な棕櫚の話がある⁴⁰⁾。1925年に田端の家の庭でも10株植えて「聊か趣きの変りたりを愛し居候。」と庭造りでは上手の室生犀星宛書簡の中で述べている⁴¹⁾。

「棕櫚の葉に」（1926）では、震える棕櫚の葉に弱ってきた自分自身の神経が投影される。

風に吹かれてゐる棕櫚の葉よ
お前は全体もふるへながら、
縦に裂けた葉も一ひらつつ
絶えず細かにふるへてゐる。
棕櫚の葉よ。俺の神経よ。

「彼」（「女性」1927）にもこの棕櫚のモチーフが使われている。「棕櫚の木はつい硝子窓の外に木末の葉を吹かせていた。その葉はまた全体も揺らぎながら、細かに裂けた葉の先々をほとんど神経的に震わせていた。それは実際近代的なもの哀れを帯びたものに違いなかった。」（14.14）「彼」とは府立第三中学校の同級生である平塚逸郎である。

更にグロテスクな病的植物連想もある。「嚙語」（「随筆」1926）では人間の病的な身体が植物に変容する。「僕の舌や口腔は時々熱の出る度に羊歯類を一ぱいに生やすのです。」「一体下痢をする度に大きい蘇鉄を思い出すのは僕一人に限つてゐるのかしら？」（13.226）

5. 樹木との感応

芥川の最初に作った満9歳1901年の落葉焚きの句に、既に植物との幻

想的な交感が感じられる。

尋常四年の時に始めて十七字を並べて見る。「落葉焚いて葉守の神を見し夜かな」。鏡花の小説などを読みあたられば、その羅曼主義を学びたるなるべし。(12.241)⁴²⁾

幼稚園時代の「銀杏の木」はすでに触れたが、中学時代の校庭のグラウンドのポプラの木はその時代の芥川の寂しさを象徴する。

この孤独に安んじた今日、——或はこの孤独に安んずる外に仕かたのないことを知った今日、二十年の昔をふり返つて見れば、彼を苦しめた中学の校舎は寧ろ美しい薔薇色をした薄明りの中に横はつてゐる。尤もグラウンドのポプラだけは不相變鬱々と茂つた梢に寂しい風の音を宿しながら。…………… (12.51)⁴³⁾

「第一高等学校在学中（仮）」には「わたしは大抵恒藤恭と植物園へ散歩に行ったり」(22.327)とあり、小石川植物園などの樹木も芥川は楽しんだことであろう。一高時代には芥川が愛した校庭の菩提樹についての「菩提樹 —三年間の回顧—」という感傷的な文章がある。

校庭に菩提樹あり。四月のはじめ、にほひよき芽をふきて、たちまち、幅広き若葉をなす。その緑は、椽にも鈴懸にもみる可らざる、やはらかくあかるき色なれば、まばゆき白日の光は其ひろ葉に落つる毎に、すゞしき木かげを、さながら青琅玕の管玉にともせるともしびの下に、夢ならぬ夢をたどるがごとくほのめかしむるが常なり。秋づけばもののはれをしること、梧桐にもまさりて、霜の朝 霧の夕、大なる鬱金の葉 紛々として樹下に堆をなす。葉おちつくせば、枝々 珊瑚珠に似たる赤く小さき実をつく。雪もよひの日、鶉の群のなきかはし

つゝ、此樹の梢に来るは皆此実をはまむとてなり。

あゝ、われ 如何にこの菩提樹を愛したる。

すぎし三年の月日は、まことに此樹下に夢みくらせし三年の月日なりき。われ若くしてうれひ多く 草をしき石に踞して、雄飛のむらさきの影にしみたる、おそ春の空のたゞずまひ、若葉のひまよりもるゝうす雲のゆきかひに、心 何時しか現ならぬ現におもひふけりて、我にもわかぬ涙の徒に零ゝとして頬をうるほすを覚えしも、亦 この菩提樹の木かげなりき。

此樹下に母のかきおこせる消息をよみつゝ、葉落ちつくしたる梢の空のほの赤きに百舌の声のけたゝましきを聞きしは今もわすれず。わが友と、黄なる紅なるあるは代赭なるこの樹の落葉をふみつ、夕空のかすかなる星を仰ぎて沙門悉達のさびしき涅槃の教えかたりしこと そもいくたびぞ。わが新しきふみをひらきし處 あゝ又これ青空にそよげる此菩提樹の木かげなりき。(以下略)⁴⁴⁾

樹木に寄せて一高時代の人生が語られる。この菩提樹の下でエンペドク羅斯を友と論じ「みづからを神にしたい」と思った芥川でもある⁴⁵⁾。

文学の自然を通して現実の風景を見る眼差しが一高時代に見られる。1910年9月の府立三中時代の同級生西村貞吉宛書簡(17.44)に「北方ロシアの白樺の林はツルゲネフに獵人日記の雄篇を齎したステツプの藍花の香はゴゴルにタラスブルバの中のあの美しい叙景を齎した「信州」も君に何物かを与へるにちがひないと思ふ」とある。1911年7月の山本喜誉司宛書簡(17.66)でもゴーゴリの『隊長ブーリバ』、トゥルゲネフの『ルージン』、『曠野のりや』、スコットの『湖上の美人』の風景などを青梅街道の旅の風景と重ねている。

「日光小品」の「戦場ヶ原」(1911)では沼、死、黄葉、蘆、落葉松、夕日、青い花、かなしみ、侘しさ、など後の作品に見られる様々な自然と

感情の結びついたモチーフが見出だされる。感傷に彩られた目前の景色と文学的風景「ツルゲーネフの森の旅」が重ねられる。

枯草の間を沼のほとりへ出る。

黄泥の岸には 薄氷が残っている。枯蘆の根にはすすけた泡がかたまって、家鴨の死んだのがその中にぶっくり浮んでゐた。どんよりと濁つた沼の水には青空がさびついたように映つて、ほの白い雲の影が静かに動いてゆくのを見える

対岸には接骨木めいた樹がすがれかゝつた黄葉を低れて力なさそうに水に俯いた それをめぐって黄ばんだ葎がかなしそうに 戦いて其間から淋しい高原の景色が眺められる。

ほゝけた尾花のつゝいた大野には 北国めいた 黄葉した落葉松が所々に腕だるさうに聳えて、其間をさまよふ放牧の馬の群れはそゞろに我々の祖先の水草を追うて漂浪した昔をおもひ出させる 原をめぐつた山々はいづれも侘しい灰色の霧につゝまれて 薄い夕日の光が僅に其頂を濡らしてゐる

私は荒涼とした思を抱きながら、この水のじくじくした沼の岸に佇んで独りでツルゲーネフの森の旅を考えた。そうして枯草の間に龍胆の青い花が夢見顔に咲いてゐるのを見た時に しみじみあの I have nothing to do with thee と云ふ悲しい言が思ひ出された (21.134)

植物との感情的交感とは別に神秘的な象徴的啓示が感じられるのが、文学への道へ進もうという契機ともなった木の葉と創造についての述懐で、妻文が回想している。

窓の外を何気なく眺めていますと、木の葉が風に吹かれて揺れ動き、その木の葉の一つ一つが、思い思いの形に揺れているのをみていると、創造の世界の素晴らしさ、美しさに魅せられて、文学を終生の仕事に

してみたいと、痛切に感じたそうです⁴⁶⁾。

6. 樹木・花への変容

既に幾つか例を挙げたが、植物への変容の興味は『葛巻文庫』(No.274-1, 2)の植物精霊信仰についての自筆ノート断片にも見られる。

植物精霊信仰は精霊信仰の一部也 精霊信仰は其性質に於て世界的也 人類の也 何れの民族もその未開の時代に於て嘗て一たびこの信仰を有せざりしはなし ラングが嘗て論ぜしが如く未開種族に其文化のある階級に於ては四圍の自然物を自己と同等の水平線上にあるものと観察することあり 外物皆己と等しく生命活動あり 生命あり活動するものに皆意志ありて変形の力を有すと信ずることあり 此点に於ては精霊信仰に靈魂信仰と聊か密接の関係を有すと云はざるべからず

植物性靈信仰は自然精霊信仰の一部にして今日尚この民族信仰を有する未開信仰を有する民族に於ては此信仰の結果たる植物精霊説話を其和、説界に発見し得べく今日既に此信仰の階級を遙かに後に遺せる今日の文化民族に於ては其傳承の低級神話界に此種の説話を発見し得べし

この文章(No.274-1)には大きく1ページに渡って×印がついているので、自分の文章が気に入らなかったという解釈もできる。ところどころに訂正の上書き線や一つレ点が見られる。文中のラングとはスコットランドの詩人・小説家・文学批評家・文化人類学者で民話・御伽噺の収集家でもある Andrew Lang (1844-1912) のことである⁴⁷⁾。この断片の裏(No.274-2)ではギリシャ・ローマ神話のナルチス(ナルキッソス)(水仙), アドニス(福寿草), キバリウソス(キュパリッソス)(扁栢), 森の精ペリデス(雛菊), 野菊になった女, 『常陸風土記』の童子女松原の話(いらつこ, いらつめがそれぞれ松に変容)が書かれている。ラングの考

えを引用しながら植物変身物語について例を挙げて文章を書くつもりであったのであろう。No.9-1は白頭翁亜族（Anemonex）^{オキナグサ}白頭翁についてアドニス^{アドニス}の物語が、そしてその原稿の裏（No.9-2）にはダフネの「(略)四肢硬直し胸に柔き樹はにつ、まれ その頭髮は木葉となり 腕は枝となり 足は地に入りて根となり顔は梢の幹となりて」という月桂樹への変容の物語が書かれている。オウィディウスの『変身物語』は芥川の蔵書にある⁴⁸⁾。蔵書のMantegazzaの*The legends of flowers*にはエロスが愛を受け入れない土星に住む氷のようなサイレン達を罰として“soulless flower”のCamellia（椿）へ変容させる話もある⁴⁹⁾。このような植物への変身物語への嗜好は芥川の植物表現や植物の象徴的解釈と密接に関係がある。

人物を植物に喩える例では、「或阿呆の一生」「二十二 或画家」でゴッホを唐黍に喩えている。「神経のやうに細ほそと根を露は」す芥川の自画像でもある。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍に忽ちこの画家を思ひ出した。丈の高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神経のやうに細ほそと根を露はしてゐた。それは又勿論傷き易い彼の自画像にも違ひなかつた。(16.50)

「槐」(1926)では観世音菩薩の「庭に年経し槐の梢」に現れるという一中節の浄瑠璃を聞き、「その図案的な枝葉を如何にも観世音の出現などにふさはしいと思つた」(13.254)と述べている。菩薩が槐に変容。

1914年10月末に移った田端の家の庭は、椎の木が多く、楓や銀杏もすこしあり、木斛、要もちもあり、裏庭には枇杷の木があって、季節ごとにたくさんの実をつけていた⁵⁰⁾。「わが散文詩」の「椎の木」(1922.11)では榲の木や樟の木と比べて椎の木を賛美している。

椎の木の姿は美しい。幹や枝はどんな線にも大きい底力を示してゐる。その上枝を鎧つた葉も鋼鉄のやうに光つてゐる。この葉は露霜も落すことは出来ない。たまたま北風に煽られれば一度に褐色の葉裏を見せる。さうして男らしい笑ひ声を挙げる。

しかし椎の木は野蛮ではない。葉の色にも枝ぶりにも何処か落着いた所がある。伝統と教養とに培はれた士人にも恥ぢないつつましさがある。榲の木はこのつつましさを知らない。唯冬との闘ぎ合ひに荒荒しい力を誇るだけである。同時に又椎の木は優柔でもない。小春日と戯れる樟の木のそよぎは椎の木の知らない気軽さであらう。椎の木はもつと憂鬱である。その代りもつと着実である。

椎の木はこのつつましさの為に我我の親しみを呼ぶのであらう。又この憂鬱な影の為に我我の浮薄を戒めるのであらう。「まづたのむ椎の木もあり夏木立」——芭蕉は二百余年前にも、椎の木の氣質を知つてゐたのである。(9.247-248)

芥川は椎の木を好んだが、榲の木はそれに比べて「つつましさがない」と酷評している。

「或阿呆の一生」「十先生」では夏目漱石の存在と文学が榲の木と秤に投影される。

彼は大きい榲の木の下に先生の本を読んでゐた。榲の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる。——彼は先生の本を読みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。…………… (16.44)

一枚の葉さへ動さない榲の木は不動の肯定的な表現のようにも見えるが、そうであれば芥川にとっては椎の木がふさわしいであらう。「硝子の皿の

垂れた秤」の平衡は脆さや危うさが感じられる。「闇中間答」(1927)では「お前は文墨に親しんだ漱石先生を知つてゐるかも知れない。しかしあの氣違ひじみた天才の夏目先生を知らないだらう。」(16.12)という芥川の捉えた「先生」の「狂気」がある。「芥川龍之介氏の座談」(1927.8)でも漱石の被害妄想や幻聴に言及して「夏目先生のそういふ方面が全く伝わらないのは惜しい事です。」(24.17)と述べている。漱石の天才の危うさがこの不動の櫛の木と天秤に喩えられているのであろう。

芥川は漱石の一周忌が迫った1917年11月に友人への書簡で白菊を詠っている。白菊に漱石のイメージを重ねている。「人去つて空しき菊や白き咲く」⁵¹⁾「たそがるる菊の白さや遠き人」「白菊や匂にもある影日なた」⁵²⁾。櫛の木の漱石が死して白菊に変容している⁵³⁾。

「保吉の手帳」(1923)の「午休み一或空想一」の海軍機関学校の庭の場面で、日の当たる南へ花を向けない「木蘭の個性」に自分自身の個性を見ている。「庭には槿や榿の間に、木蘭が花を開いてゐる。木蘭はなぜか日の当る南へ折角の花を向けないらしい。が、辛夷は似てゐる癖に、きつと南へ花を向けてゐる。保吉は巻煙草に火をつけながら、木蘭の個性を祝福した。」(10.54)

「沼」(執筆時期1918.3、『改造』1920.4)は、「スマトラの忘れな草の花」⁵⁴⁾を探して「蔦葛に掩はれた木々の間を、^{ゆめうつつ}夢現のやうに歩いてゐた」「おれ」が丈の高い蘆に囲まれた沼のほとりの年経た柳から「不思議な世界」を求めて沼へ飛び込むが、「おれの死骸の口から」茎が伸び始め、水面で白い睡蓮の花が「的礫と鮮な蒼を破つた」(6.14-15)と言う幻想的な変容である。ボードレールの散文詩「旅への誘い」に彩られたこの情景は芦の茂った気味の悪い流れ灌頂や馬の骨があった大川の中州の経験も反映しているのだらう⁵⁵⁾。この主人公は自分の死から白い睡蓮の花へ変容して象徴的に再生する。「じゆりあの・吉助」や「往生絵巻」と同様に聖な

る花への変容例と考えられる。

「きりしとほろ上人伝」(1919)では柳杖と薔薇がきりしとほろの聖なる変容の姿である。「唯後に残つたは、向うの岸の砂にさいた、したたかな柳の太杖で、これには枯れ枯れな幹のまはりに、不思議や麗しい紅の薔薇の花が、薫しく咲き誇つて居つたと申す。」(4.230)

「沼地」(1919.5)で描写される絵の中の荒れ果てた沼は「うす暗い空と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢いで生きてゐる。」(4.240)痛ましい芸術家が自然自身になった自画像である。「^{おううつ}翁鬱たる草木」は画家の芸術的植物変容の姿である。

「じゅりあの・吉助」(執筆終了1919.8)では磔刑に処せられた吉助は死骸の口から白百合が咲き出でる。「彼の屍骸を磔柱から下したとき、非人は皆それが微妙な香を放つてゐるのに驚いた。見ると、吉助の口の中からは、一本の白い百合の花が、不思議にも水々しく咲き出てゐた。」(5.97)

『沼』の「おれの死骸の口から」出る白い睡蓮との関連は明らかだが、『葛巻文庫』No.259-1のリー・ハントの白百合を詠った詩の一節にも聖なる白百合が見られる。

聖き光の花なれや／神とりもちて宣ひぬ／「見よ我白き思ひを」と

「往生絵巻」(1921.4, 1922)では枯れ木の梢の上で果てた五位の入道の口からは「まつ白な蓮華が開いてゐる」(7.277)。典拠の『今昔物語集』では蓮華の色への言及はない。芥川が使用した校註國文叢書の『今昔物語』では「見れば口より微妙く鮮なる蓮華一葉生たり、住持此れを見てな

き悲び貴びて、口に生たる蓮華をば折り取つ」とあり蓮華の色はわからない⁵⁶⁾。同様の話がある『私聚百因縁集』、『発心集』、『宝物集』では、「青蓮花」である⁵⁷⁾。芥川が白蓮華にしたのは、極楽往生した人は蓮華の上に生まれるといい、ブンダリーカ（白蓮華）を最高とするからであろうか⁵⁸⁾。「じゅりあの・吉助」の白百合の白色も想起される。『今昔物語集』にある五位の入道の呼ぶ声に阿弥陀の応える声を芥川は省いた。その理由が「ヒステリックの尼か何かならば兎に角逞ましい五位の入道は到底現身に仏を拝することはなかつたらうと思ひますから」で、「口裏の白蓮華は今でも後代の人の目には見えはしないかと思つてゐます」と述べている⁵⁹⁾。現代人は仏には出会えない。だが最期の自分の生の証としての詩的象徴の花は生まれるという芥川の思いがここに表現されている。信心の「狂気」の果ての五位の入道の聖なる白蓮華へ再生する植物的変容である。

遺稿「十本の針」「四 空中の花束」では「(略)即ちわたしたちの精神的飛躍の空中に捉へた花束ばかりである。」(16.25)と芸術そのものを花束に喩えているように、聖なる花への変容も芥川の芸術観と密接な関係がある。「ひとまところ」(1924.9.18)の芥川作の漢詩に絶域に咲く花が詠われる。「異花開絶域 滋蔓接清池 漢使徒空到 神農竟不知」(珍しい花が遠いところで咲いている。その枝葉は茂りはびこり、水の清い池に続いている。中国の使者が来ても無用。神農でさえ、この花を知らない。)⁶⁰⁾。神農でさえ知らないのであるから、この「異花」は東洋の花ではない西洋と混淆した芥川の目指す芸術の象徴である。

7. スマトラの忘れな草

「沼」で見られるように、芥川はなぜボードレールの散文詩「旅への誘い」のスマトラの忘れな草に敏感に反応したのであろうか。ボードレールの“un revenez-y de Sumatra”の“un parfum singulier”「一種独特な芳香」⁶¹⁾が「あの「スマトラの忘れな草の花」も、甘い匂いを送つて来はし

ないであらうか。」という「甘い匂い」に変わっている。芥川は植物の「匂い」に敏感である。忘れな草については既に1914年に「紫天鷲絨」で「五月来ぬわすれな草もわが恋も今しほのかににほひづらむ」(1.50)と詠っている。1919年6月の日記「『我鬼窟日録』より」で北原白秋と平民食堂百万石へ行った時の頃の夜の往来の匂いへの言及がある。「若葉の匂、花の匂、苔の匂、樹の肌の匂などが盛にする。その中で銭湯の匂などがすると、急に人間臭い気がして不愉快になる。」(6.9) 人間世界と対照された植物の匂いへの好みがわかる。

「スマトラの忘れな草」について1920年7月中西秀男宛書簡で「ラヴィタシオン・オウ・ヴォアイヤアヂュは好いでせう僕は昔からあの中の「スマトラの忘れなぐさの花」なぞと云ふ文句が好きなのです「月」「薄明かり」「窓」その外ボオドレエルの中には好い散文詩が多い筈ですゴオティエの名高いボオドレエル論を読みましたか 風ふけば心かなしもスマトラの忘れなぐさの香やふきて来し」(19.77)と述べ、歌まで詠んでいる。

もっとも“un revenez-y”は忘れな草という意味ではない。フランス語の忘れな草“myosotis”のよく使われる表現は“ne m’oubliez pas”である。1916年10月発行の『感情』第4号の山村暮鳥訳の「ボードレール散文詩集」は誤訳の多さを指摘されて暮鳥が卒倒したというしろものだが、「航海の招待」(十四章)では「スマトラの *REVENEZ-Y* よ」と和訳が避けられている。芥川が読んだと推定されている当時よく読まれた Canterbury Poets Series の Sturm のボードレール詩の英訳も“a Sumatran revenez-y”となっていて、この語は英訳されていない⁶²⁾。Sturm 訳は蒲原有明がすでに1907年後半以降ボードレールの詩の訳(「旅への誘い」の訳はない)に使用しているが、他のボードレールの英訳には Merrill 訳や Symons 訳等がある⁶³⁾。芥川が「忘れな草」としたのは、Symons の英訳の“forget-me-not”からであるかもしれない(“exhales a singular odour, a “forget-me-not” of Sumatra, which is, as it were, the soul of the abode.”)⁶⁴⁾この本は芥川の所蔵にないが、図書館で借りた可能性もある。所蔵本の

Smith の英訳 (1919) も Symons の訳をそのまま踏襲している⁶⁵⁾。

「沼」草稿」では「度々おれの夢に見る「西の花」も、蜜のやうな匂を送つて来はしないらうか。」(21.261) となっており「スマトラの忘れな草」も「Invitation au Voyage の曲」も出てこない。「西の花」は東洋にいる芥川から見たボードレールの『悪の華』であろう。「沼」が後に収録された『沙羅の花』と『梅・馬・鶯』に「沼」の執筆時期が1918年3月であると示されているが、これが草稿の「沼」の執筆時期を指しているのであれば、『改造』(1920.4) に掲載する際に1919年発行の Smith の訳を手に入れたので「忘れな草」の表現を入れて書き直したことも考えられる。1919年10月発行の馬場陸夫訳の『詩集 悪の華』では「スマトラの忘わすれな草なぐさの香りが発散するのだ」となっているのでこれも改作のとき参照し得た⁶⁶⁾。

“revenez-y”は文字通りは「(昔の感情, 感覚などの) よみがえり」という意味で, “un goût de revenez-y”という表現の意とすれば, 「もっと欲しくなる味」である⁶⁷⁾。ちなみに芥川没後の高橋廣江訳(1928)では「スマトラの一度嗅げばもう一生涯止められない薫香が, 部屋の魂でもあるかのやうに, 匂つて来ます。」と“un goût de revenez-y”と香りを組み合わせた訳である⁶⁸⁾。阿部良雄訳(1987)は「一種独特な芳香, アパルトマン住居の魂ともいふべき, スマトラの「思い出の香り」が立ちのぼる」である⁶⁹⁾。芥川はボードレールが意図しなかった, そこには存在しない植物「忘れな草」に敏感に反応していることとなる。

芥川が特に「忘れな草」に思い入れがあるのには更に理由がある。芥川が一部書写した川上瀧弥, 森廣『花』に「忘れな草は英語の直譯, 和名は姫むらさきと名づくべき紫草科の小草にして, 西洋の俗, 甚だ之を愛玩す」(p.129)とあり, 卷末の「花言葉」のp.5に「Forget-me-not ヒメムラサキ 眞の愛」とある。忘れな草の名の由来として, 新婚の前夜処女の望みで許嫁の男がダニューブ河畔に咲く「愛らしき空色」の花をとろうとして, 激流に飲まれた話を載せている (pp.130-131)。また処女を愛した

ために天使が追放され、女は忘れな草を地の隅々まで植えなければ楽園に入ることを許されなくなったが、天使と処女がその務めを終えて楽園に帰り、忘れな草をまとして女は死せざる人になるという伝説も載せている。(pp.132-133) 男女の悲恋や愛に関する西洋の伝説の花というイメージである。

西洋文学の新思潮を紹介した上田敏訳詩集『海潮音』(1905)にはドイツの詩人ウィルヘルム・アレント (Wilhelm Arent) の詩「わすれなぐさ」“Vergiss-mein-nicht”が所収されている。芥川に自然を見る目を与えた文学の一つにトゥルゲーネフの『獵人日記』がある。芥川所蔵の英訳本にはパッセージの横に赤線が引かれている話があるが、それが「あいびき」“XIX The Tryst”である⁷⁰⁾。この話には素封家の室僕アレクサンドロイチの指輪の飾りの“turquoise forget-me-nots”の表現や農民の娘アクリーナが摘む花の一つに“forget-me-nots”が見られる⁷¹⁾。二人の別れを暗示する忘れな草である。

芥川が愛読した北原白秋は『朱欒 ザンボア』1912年6月号で三木露風と二人だけの『朱欒』特集号、詩集「勿忘草」を刊行している。白秋はこの名前をつけた由来を「この詩集に 仄かな勿忘草の名をつけたのはその陰影のなつかしさを憐れむけふ日の心と、純一な芸術の気分を慕ふ二人の好尚が何かしらその花の匂を棄てがたく思はしめた故である。」⁷²⁾としている。「勿忘草」の「匂」と芸術との関連が見られる。芥川自身も1912年12月山本喜誉司宛書簡でユンケルの演奏会でのグリークの曲に関して「わすれな草のやうに幽艶なグリーヒ」(17.97)と音楽の比喩にこの花を用いている。「TAKEHIKOとWAKATARU(仮)」(1914)には夢の情景に薔薇が出て来るが、その色の一つとして「勿忘草のように水色」という表現がある。1915年5月には北原白秋『抒情小詩選 わすれなぐさ』(阿蘭陀書房)が刊行されている。芥川は「文芸的な、余りにも文芸的な」(1927)で白秋の散文を評価し「僕等の散文に近代的な色彩や匂を与へたものは詩集「思ひ出」の序文だつた。」(15.161)と述べている。愛読した

白秋と心酔するボードレールの「勿忘草」の一致は芥川にとっては意味のあることだったのであろう。

「書と人と」(年代未詳)では現代人も猴に過ぎず、山林への思慕を満たすロマンティシズムの文芸について述べ、「だからシヤトオブリアンは、遠い亜米利加の森の奥へ、「青い花」を探しに行つた。」(22.271-272)と書いている。白秋の『邪宗門』にも「青き花」の詩がある。忘れな草は芥川の「青い花」の一つであったと言えるだろう。

8. 結語

芥川のほんの一部の植物体験と表現を取り上げたにすぎないが、植物との交感と植物への変容は芥川作品における重大なモチーフの一つであり、芥川の植物的世界は芸術的想像力と密接な関係にあることがわかる。

注

- 1) 拙稿「芥川龍之介の庭——創造の生成場所としての異種混淆」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』No. 58 (2011), pp.19-50。本稿では芥川の植物愛と芥川の想像力と密接に関係する植物表現を考察する。
- 2) 芥川が数え年11歳の時に母フクは亡くなったが、深夜養母と人力車に乗り芝へ駆けつける時に首に巻きつけていたのは香水の匂いのする「南画の山水か何かを描いた、薄い絹の手巾(ハンケチ)」であった。芥川の最期の枕頭の床に掛けられていたのは、「柳陰呼渡」と書かれてある愛石の素朴な山水画である。1919年に芥川家のかかりつけの医者で友人でもある下島勲から譲り受けたもので「淡々の意愛す可し」と芥川が大切にしていたものである。関口安義・宮坂覺 監修『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念展—』産経新聞社, 1992, p.61。佐藤春夫『おもかげ』参照。全集(23.19)。日本近代文学館編『芥川龍之介の書画』二玄社, 2009, p.47。芥川作品の引用は主に岩波書店の全集(1995-1998)から引用し、第23巻19ページを(23.19)のように略記する。書簡の場合は巻数とイタリック体の書簡番号で記す。作品名の後に執筆校了か初出の年号あるいは年号と月を付記した。
- 3) 「長崎日録」(9.259-262)。
- 4) 「大震雑記」(1923.10), (10.142)。
- 5) 下島勲『人犬墨』竹村書房, 1937, p.134。

- 6) 「資料紹介(六) 長江の生活」『芥川龍之介全集 [第2次] 月報21 第21巻』, 2008年, pp.9-10; p.9.
- 7) 『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念展—』産経新聞社, 1992。『芥川龍之介の書画』など参照。
- 8) 『芥川龍之介の書画』, pp.24-25, p.190。『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念展—』, pp.20-21。
- 9) 全集(18.498), 1918年9月18日の井川恭宛の絵葉書。
- 10) 1920年(大正9年)8月9日滝井孝作宛の絵葉書(19.820), 同8月21日松岡譲宛絵葉書(19.828)。中村真一郎『芥川龍之介展』, 神奈川文学振興会, 1992, p.9.
- 11) 『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念—』, p.32。『藤沢市文書館紀要』20(1997), 巻頭口絵写真。
- 12) 佐藤春夫編集『澄江堂遺珠』岩波書店, 1933。
- 13) 「追憶」(1926-1927)『芥川龍之介全集 第13巻』岩波書店, 1996, p.289。
- 14) 「現代十作家の生活振り」(1925)(12.79)。
- 15) 角田忠蔵『芥川龍之介自筆未定稿圖譜』大門出版美術出版部, 1971, pp.208-209。
- 16) 「葛巻文庫」(No.12-1, 2, No.14, No.16-1, 2)。
- 17) 『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念展—』, p.34。
- 18) 『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念展—』, p.34。
- 19) 『もうひとりの芥川龍之介—生誕百年記念展—』, p.34, p.38。佐藤春夫『おもかげ』, p.3。葛巻左登子「兄のことに就いて 付・芥川龍之介の終焉のこと」『藤沢市文書館紀要』20(1997), pp.75-80; p.78。吉田精一・芥川比呂志『写真 作家伝叢書7 芥川龍之介』誠光社, 1967年, p.56, p.83。
- 20) 天竺蜀葵はテンジクアオイ(ゼラニウム)のこと。
- 21) 佐藤春夫編集『澄江堂遺珠』岩波書店, 1933, p.52。神代種亮の「巻尾に」参照。雁皮は中国原産で観賞用として切り花や鉢植えにする岩菲 *Lychnis coronata* のこと。
- 22) 全集(17.353 注九五9)。関口安義編『芥川龍之介新辞典』翰林書房, 2003, p.628。日本近代文学館編『芥川龍之介の書画』二玄社, 2009, p.220。
- 23) 全集(18.3, 18.216)。
- 24) 1924年7月28日室生犀星宛書簡(20.1314), 1924年9月12日室生犀星への書簡(20.1333)。(20.343-344 注解七八10) 参照。
- 25) 『芥川龍之介新辞典』, p.648。
- 26) 『澄江堂遺珠』, pp.69-70。
- 27) 『澄江堂遺珠』, p.71。

- 28) 櫛原直樹「藤沢市文書館所蔵『葛巻文庫』の芥川龍之介自筆資料—ノート断片・草稿断片・手帳—」『藤沢市文書館紀要』21 (1998), pp.1-43. (巻頭に自筆ノート断片と手帳四の口絵写真あり); pp.1-2.
- 29) 1910年発行の5版参照。
- 30) この本は初版が1902年発行の『はな』であるが、この部分の記述は同じである。
- 31) Robert Herrick, *The Poems of Robert Herrick* (The World's classics) (London, etc.: Oxford University Press, 1902, rpt.1909); p.xi, p.122. 『芥川龍之介文庫目録』日本近代文学館, 1977, p.13. 筆者調査。
- 32) 全集 (17.179)。
- 33) *The Poems of Robert Herrick*, p.36, p.ix, p.81.
- 34) Robert Burns, *Poetical Works of Robert Burns*, with life and notes by William Wallace, LL.D. (London, etc.: Dutton & Company, [n.d.]); p. xx, pp.162-164. 『芥川龍之介文庫目録』日本近代文学館, 1977, p.7. 筆者調査。
- 35) *Poetical Works of Robert Burns*, p.xviii, p.2; p.xiii, p.379.
- 36) 「英国詩人の天地山川に対する観念」『漱石全集』第13巻, 岩波書店, 1995; p.50, p.51, pp.53-54.
- 37) 山梨県立文学館『芥川龍之介未定稿資料』(1993年) 図版2, 「アイヌ神話二, 福寿草」, p.605. 蜀黍の生長するときの音についての「植物の成長」, 「毒樹毒草」, 「ブルガリアの怪樹」という文章などもある, 『芥川龍之介未定稿資料』図版2, pp.605-605, p.610. 「芥舟」ではないが, 満17歳の時1909年3月28日の書簡に芥川狂生の名を使っている (17.11, 17.12)。
- 38) 「追憶」「中洲」(13.293)。
- 39) 鈴木秀治「芥川龍之介とジュール・ルナール」『愛知大学文学論叢』97 (1991.7), pp.55-82. 柏木隆雄『交差するまなざし—日本近代文学とフランス—』朝日出版社, 2008.
- 40) 全集 (23.204)。
- 41) 全集 (20.186, 20.1482). 佐藤春夫『おもかげ』p.21の写真参照。
- 42) 「わが俳諧修行」(1925)。
- 43) 「大導寺信輔の半生—或精神的風景画—」。
- 44) 葛巻義敏 編『芥川龍之介未定稿集』pp.450-452. 漢字の旧字体を新字体に改めた。
- 45) 「ある旧友へ送る手記」(16.8)。
- 46) 芥川文(述)・中野妙子(記)『追想 芥川龍之介』筑摩書房, 1975, pp.31-32.
- 47) Langの芥川の所蔵本は御伽噺集の一つである。Andrew Lang, ed. *The crimson fairy book* (London: Longman, 1914) 植物ノート (274-1-274-2)

- に挙げた内容を含む Lang の神話や未開民族についての著作は以下のものがある。Andrew Lang, *Myth, Ritual and Religion* (London, 1906). Pp.154–157 には世界各地の植物への変身物語への言及がある。
- 48) Naso Publius Ovidius, *The metamorphoses*, tr. into English prose by Henry T. Riley (London: Bell, 1915). 日本近代文学館『芥川龍之介文庫目録』1977, p.19。
- 49) Paolo Mantegazza, *The legends of flowers or “The love that makes the world go round”*, tr. from the Italian by Mrs. J. Alexander Kennedy, with frontispiece by Walter Crane (Edinburgh: Foulis, 2nd series, 1909). この物語が口絵になっている。『芥川龍之介文庫目録』, pp.16–17。
- 50) 関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房, 1999, p.308。
- 51) 1917年11月24日松岡譲宛書簡(18.387)。
- 52) 1917年11月25日池崎忠孝宛書簡(18.388)。
- 53) 白菊に関しては1915年12月3日井川恭宛書簡で4種の歌を詠んで「白い菊をみんな誰かどこかへもつて行つてしまふといふ あれは人をセンチメンタルにしていけない実際いけない」(17.211, 17.323)と書いている。
- 54) ボードレールの『パリの憂鬱』18「旅への誘い」の語“un revenez-y de Sumatra”の和訳で、おそらく Symons か Smith の英訳の“forget-me-not”から訳したものであろう。本論7を参照。
- 55) 「追憶」「中洲」(13.293)。
- 56) 池辺義象編『今昔物語(上)』(校註國文叢書 第16冊)博文館, 1915; p.555。
- 57) 比良輝夫「卷二十話「讃岐源大夫悪人往生」『私聚百因縁集の研究 本朝篇(上)』北海道説話文学研究会編, 和泉書院, 1990, pp.263–278; p.276。『発心集』(『方丈記 発心集』(新潮日本古典集成)新潮社, 1976, p.136)「舌のさきより, 青き蓮の花なん一房おひ出でたりける。』『宝物集』(『新日本古典文学大系40 宝物集 閑居友 比良山古人霊記』岩波書店, 1993, p.345)「口より青蓮花おひて, かうばしき匂ひ有りて。』『私聚百因縁集 下』愚勧住信集述(古典文庫272), 1970, p.139「舌前ヨリ青蓮華ナント一萼生出でタリケリ」。
- 58) 全集(7.356), 注二七七14。
- 59) 1924年2月12日正宗白鳥宛書簡(20.1248)。
- 60) 全集(23.536)。邱雅芬『芥川龍之介の中国—神話と現実』花書院, 2010, pp.159–160。
- 61) « s'échappe un parfum singulier, un revenez-y de Sumatra » *Baudelaire : Œuvres complètes*, 2 tomes, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, (Paris, Bibliothèque de la Pléiade, NRF – Gallimard, 1975 et 1976),

tome I, p.302.

- 62) 北村は芥川が Frank Pearce Sturm 訳のボードレールの散文詩を読んだと推定している。Sturm の訳は “a singular perfume escapes, a Sumatran revenez-y, which is like the soul of the apartment.” F.P. Sturm, *Poems of Charles Baudelaire* (London and Newcastle-on-Tyne : The Walter Scott Publishing co., ltd, n.d.); p.100. 北村卓「芥川龍之介におけるボードレール受容の展開」『テキストの生理学』柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編, 朝日出版社, 2008, pp.385–396; pp.386–388。
- 63) 矢野峰人『矢野峰人選集 2』, 図書刊行会, 2007; pp.353–354. Stuart Merrill, tr. *Pastels in prose, translated by Stuart Merrill, with illustrations by Henry W. McVikar, and an introduction by William Dean Howells* (New York: Harper & Brothers, Franklin Square, 1890). この本には散文詩「旅への誘い」はない。Arthur Symons tr. , *Poems in Prose from Charles Baudelaire* (London: Elkin Mathews, 1905), p.17.
- 64) Arthur Symons tr. , *Poems in Prose from Charles Baudelaire*, p.17。
- 65) T. R. Smith, ed. *Baudelaire, his prose and poetry*. (New York : Boni and Liveright, 1919); p.42
- 66) 馬場陸夫訳『詩集 悪の華』洛陽堂, 1919年10月; p.333
- 67) 『小学館ロバール仏和大辞典』(小学館, 1988) “revenez-y”の項参照。
- 68) シヤルル・ボードレール著・高橋廣江譯『巴里の憂鬱』青郊社, 1928; p.80。
- 69) 散文詩「一八 旅への誘い(いざない)」ボードレール『ボードレール全集 IV』阿部良雄訳, 筑摩書房, 1987, p.40。ボードレールの他のヴァージョンでは「東方の軽い芳香」«échappe un parfum singulier, un léger parfum d’Orient qui »(1857), « échappe un parfum singulier, un léger parfum oriental qui »(1861)。*Baudelaire : Œuvres complètes*, 2 tomes, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, (Paris, Bibliothèque de la Pléiade, NRF – Gallimard, 1975 et 1976), tome I, p.1323。「悪の華」の「五三 旅への誘い(いざない)」では“Les plus rares fleurs/ Mêlant leurs odeurs/ Aux vagues senteurs de l’ambre”「世にも珍しい花々の 匂にまじり漂うのは、微かに、あるかなきかの、竜涎の香」(『ボードレール全集 I』阿部良雄訳, p.104。)となっているので、ボードレールが想定した“revenez-y”は「思い出し、よみがえる、何度も嗅ぎたくなるようなスマトラの香り」、特定すれば「スマトラ産の竜涎香」という意味であろう。
- 70) Ivan Turgenev, *A Sportsman’s Sketches*, tr. from the Russian by Constance Garnet, 2 vols. (*The Novels of Ivan Turgenev*, vol.VIII & IX) (London: William Heineman, 1906)『芥川龍之介文庫目録』, p.24。パッセージ横の

赤線は vol. II, p.92, p.105 の 2 箇所。筆者調査。

- 71) Ivan Turgenev, *A Sportsman's Sketches*, vol. II, "XIX Tryst", "his starched cuffs hid his whole hand to the red crooked fingers, adorned by gold and silver rings, with turquoise forget-me-nots. ", p.97; "forget-me-nots", p.100。二葉亭四迷の初訳では "Myosotis", "myosotis" となっている。二葉亭四迷譯「あひゝき・片戀・奇遇」(岩波文庫), 1955, p.10, p.13。「明治二十一年、七・八月 「國民之友」第三卷、廿五・廿七號所載」1896 (明治 29) 年 10 月発行の単行本『片戀』では「ネザブツカ」。同岩波文庫, p.177。
- 72) 『朱戀』特集号, 詩集「勿忘草」p.79。

Synopsis

The Plant Kingdom of Ryunosuke Akutagawa: The Inspiration of Plants and Their Metamorphosis

Shoji Nishikawa

Ryunosuke Akutagawa loved plants. He loved to have flowers in his room, such as carnations or hyacinths in a vase or Christmas roses in a pot. He not only made haiku and waka about various flowers but also referred to a variety of plants in his letters, travel writings, and other works. His unrequited love was always expressed by flowers in waka. In the Kuzumaki Archive there are numerous fragments of writings classified as “Plants notes” or “Plant myths notes” which show his interest in plants and flowers during his childhood and youth. Akutagawa copied passages of flower fortune-telling, translations of English poems about flowers, some of which may contain his own translations, and tales and myths about metamorphoses into flowers. His drawings of trees seem to represent himself. Symbolic trees are found in his writings about his own life: a ginkgo tree in his kindergarten, a poplar in his junior high school, and a lime tree in his senior high school. His special interest in metamorphoses into sacred flowers is found in *Marsh*, *St. Christopher*, *Jyuriano Kichisuke*, and *Ojyo Emaki*. The writer’s keen interest in Baudelaire’s “forget-me-not” used in *Marsh*, which actually does not exist in Baudelaire’s prose poem

“L’invitation au voyage”, was aroused by a mistranslation of “*revenez-y*” as “forget-me-not” and must have been connected to Hakushu Kitahara and Rofu Miki’s collection of poems entitled *Forget-me-not*. The forget-me-not is one of Akutagawa’s symbolic “blue flowers”. His love and knowledge in plants significantly informs his creative imagination.